

撃せられ、辛うじて身を以て免れたる事ありき。

彼の保守的なる凡そ何事も一たび先入主となれば、蹂んでも蹴つても動かざる程に之を頑守す。褒めていへば意志堅實、貶していへば所謂琴柱に膠するの類のみ、是れ即ち彼の短所にして又長所なり。而も彼は當時の市有論と今日の市有論とは、自から根本の相違あるを知らずして、尙依然として昔日の説を今日にも當倣めんとす。是に於て森久保一輩の徒は彼が歴史的に市有論者たるは一は此二者の間に貸借關係あるとを利用したれば、中島は森久保の爲めに手馴けられ、電車市營運動のお先棒に使はるゝに及ぶ。蓋し尾崎の市營論を以てお先眞暗流とせば、中島の利用せられしは畢竟繩の緩める證據にして、俱に情狀酌量すべきものあり。

彼の面貌、態度、口吻宛として老婦人の如し、故に人皆彼を呼ぶに『市會

のお婆さん』の渾名を以てす。然れども此婆さんは虫も殺さぬ顔付をなしつゝ案外喰へぬ代物にして、最も貨殖の術に長ず、是れ彼が今日に至るまで巨萬の富を積める所以なり。彼れ金力を以て壯士を養ふの度胸なきも、所謂お婆さん式にチビリ／＼金を與へ、御馳走をなして男妾、變童を養ふに過ぎざるのみ。今日の彼は最間十年前の彼にあらず、半ば耄條の境に入れり。而も尙市會に勢力を維持せる所以のものは畢竟往年の隋力と、年長者たるの故を以て老人の顔を立つると謂ふに過ぎず。

常磐會は亂暴壯士の紳士化したる者にあらずんば則ち東京市を喰物にして掛れる狼連の集團にして、就中最も露骨に簡性を發揮せるものは江間俊一なり。江間の有名なるは代議士、市會議員、若くは辯護士としてにあらずして無論壯士としてなり。彼も故屋亨を神の如く崇拜したる一人にして、森久

保作藏、利光鶴松、井上敬次郎と共に星門の四天王と稱せられき。初め星の米國より歸るや、主として此四人は星を首領に押立つるにあらずんば、東京市に事を成す能はずとして彼を擔ぎ、後ち電車民有論の星に依て提唱さるゝに及び、江間も亦利光の手先となりて悪鏡を握りたる一人なりき。

市會に於ける勢力は一時森久保と併び稱せられ、二元兎として市民清議の指彈を受けたれども、今日は森久保の勢ひの日に旺んなんと反比例に、漸次下坂となれるが如し。現に前年電車値上問題に際し市長尾崎の反對を排して高手的に壓伏し、終に一人の反對なくして市會を通過せしめたるは江間の力なるも、四十二年の電車市營運動には森久保主として采配を振り、江間は唯だ少く裏面的關係ありしやに推測せらるゝまでにして、直接手を染めざりしに徴するも明かなり。併し何といつても森久保に亞ぐ者は江間にして、市會

議員中彼の前に頭の上らざる者多し。蓋し森久保と江間は元來役者が違ふが故に、難局に處するに方りても自ら科白を異にす。詳言すれば森久保は腕力を出しさうで容易に出さず、之に反して江間は壓迫と脅威を以て得意とし、屢次短氣を起して鐵拳を飛すの點は殆んど常識を失せり。故に森久保の巧みに他を懷柔して己れの爲めに利用するに反し、江間は動もすれば人の反感を買ひ友人を失ふ、其老獪なる點に於て彼れ豈に遠く森久保に及ばんや。或人評して曰く、森久保はイアゴース式の實惡にして、江間は飽まで壯士芝居の立廻り役者に過ぎずと。

然れども江間は漢洋二學の素養あり、曲りなりにも法律を解し居れば、一方の全然無學なるが爲め表面に立つ能はざるに反し、代議士としては嘗て懲罰委員長、又東京市の築港委員長となり得たり。唯だ一の不思議とすべきは腕

力萬能主義を奉ぜる粗暴過激の彼が歌舞吹彈の伎を能くし、或は梁苑章臺の遊を好み、詩文書畫を愛し、殊に鐵筆に長じ、多藝風流の才子を以て自ら任ずること是れにして彼と此と何ぞ矛盾するの甚しきや。近者彼のいふ所を聞くに、阿嬌に乗るよりも馬車に乗るの快なるに如かずと、而も是れ自ら僞り又人を欺く者のみ。要するに江間の如きは凶險亂を好むの徒にして、彼が市政の事に携はるの間は市民は到底危険の念を去る能はざるなり。

往年の公友會十七人組中、中島は年と共にタマニ黨の藥籠中に入れりと雖も、尙依然として當年の本領を存し、侃々の論、諤々の議を以て常に森久保一派の憂ひを成せる者、之を野々山幸吉となす。彼は元と眇たる縁日商人のみ、豈に初めより誇るべき門地と經歷とあらんや。然れども裸一貫より漸次今日の位置と資産を贏ち得たるを視れば又尋常一様の人物にあらざるを知

るべし。乃ち彼が一本の天秤棒に依て自己の運命を作りたるは畢竟意志の堅實なるに因るが如く、十年來志操を二三にせずして或る信念の上に立てるも亦豈に之が爲めなるなからんや。

當時星一派は彼が反對の位置に在るを恐れ、或は啗はすに利を以てせんとし、或は七重の腰を八重に折つて味方に引入れんと試み、或時の如きは星自ら彼を呼付け、脅威壓迫して説伏せんとしたるも、彼は頑として應ぜざりき。世間或は彼が前年市營反對の急先鋒たりしは市民の俗論に附和雷同して人氣を博し、選舉の場合に己を利せんとするの敵本主義に出づと誣ゆるものあり。何人も主義に於て電車市營に反對する者なし。然れども今日の市營論が果して誠意に出づるや否やの疑はしきのみならず、或一派が之を孤注として百策千謀至らざるなきを見て、主義としての市營賛成論者も自ら事實問題に於て

反對論者とならざるを得ず。彼は舊東鐵株主の一人なれば一箇人の利益よりすれば當然市營運動に賛成すべき筈。而も森久保、利光、江間等の相談に乗らざりしは箇人の利害を棄て、市民を本位としたるに因る。蓋し彼が常に正義派の急先鋒となり得るは氣骨、恒産、恒心の三つを有すればなり。

彼は深き教養あるにあらざるも、頭腦明瞭にして大體に通じ、常識に富めるの點は今の少數黨中推して第一人とすべし。其キビクせる江戸ッ兒辯を以て間々警句を交ゆる彼の談論は聽者をして小氣味好き感をなさしむ。唯だ何人の前に於ても無遠慮に言捲り、口を突て出づる皮肉は人の肺腑を抉り骨を刺すが故に、意外の邊に敵を招き、又餘りに偏屈にして清濁併せ呑むの量なきが故に、動もすれば榮々孤立の境に立つを免れず、是れ彼の缺點なり。然れども素町人の出を以て普通の政治ゴロと其科を異にし、性來潔癖なると

共に、我流を通さんとする自信力あり。若し彼にして市參事會若くは委員の一人たらんと欲せば、必ずしも不可能なるにあらざるべきも、常磐會の醜類は彼を破壊的人物として忌憚するの甚しきが故に、市參事會に足を容れしめず、彼も亦強て之を望むの意なきに似たり。

投機界のハレー彗星

上

投機と春晝は意外の人に愛翫せらる。世間一般に投機を賤むの常なるも、何事に依らず善意に解すべきと悪意に解すべきとありて必ずしも一概に論じ

難し。蓋し『スベキユレーション』の弊動もすれば經濟上の波瀾と一身一家の覆没を伴ふの危険あるも、凡そ人に思惑なきはなく、是れ即ち人間天賦の通有性なればなり。去れば公然相場界に出頭没頭する黒人筋の外にも、實際は思ひも寄らぬ人物の竊に指を之に染むるの多く、之を官吏にも軍人にも華族にも見出すを得べし。

川柳氏曰く「お祭は止めた親爺が肌を脱ぐ」と、何ぞ夫れ社會の情偽、人心の機微を穿てるの至妙なるや。投機界に於て日清戦争後の苦き經驗を嘗めたる者は日露戦争に際して他人の株に手を出すを笑ひ、所謂る羨に懲りて膾を吹く者多かりき。而も彼等が心配せる中は轉ばざるも、一たび鈴木久五郎が一千万圓儲けたりとか、某が五百萬圓掴みたりとか、耳寄りの話を聴くに及びて凡夫の淺間しさには自ら其鬢に倣うて狂奔するに至る。現に從來地所の

外買入れしことなき山田忠兵衛が株の爲めに失敗して終に土左往生を遂げしが如き其一例とす。今日は閥族専私の昔と異り、政府に豫算の制定あり、戦争は容易に起らず、随つて政府に黃縁して産を起すの困難となりたれば勢ひ腕一本に頼らざるべからず。之を地道の方面よりいへば、我邦には大地主なきを以て地所に依て成功したる者少きも、所謂實業に依て富を致し、者に住友吉左衛門、安田善次郎、藤田傳三郎、古河市兵衛、森村市左衛門、貝島太助あり。而して一方には投機業なるものあり、由來斯業は一攫千萬金、陶朱倚頓を回すの大分限となるは一朝夕の事と稱せらるゝも、統計を調ぶるまでもなく相場に依て成功したる者より失脚したる者の多きは争ふべからず。成金は日露戦争の副産物にして一時は大成金、中成金、小成金雨後の筍の如く輩出し、布衣より一躍して王侯の冠冕を戴きたる如く氣満ち意驕るのみ

ならず、世上の凡夫を驅つて成金にあらざれば恰も人にあらざるが如く羨望措く能はざらしめたり。然れども日露戦争の成金にして能く今日に至るまで成金の實を永續したる者幾人ありや。彼等の多くは最初如何にも花々しく咲出でたれども、長くは二三年、短きは半年ならずして泡沫の如く消去れり。鈴木久五郎も亦倏忽として出現し倏忽として姿を没し、恰もハレー彗星に似たる一人とす。蓋し鈴木久は近代の日本が産出したる成金中の最も著大なる者にして、一時は恰も成金黨の代表者の如く謳歌せられしが、其名を投機界に唄はるゝまでは、何人も鈴木久の何者なるやを知る者なかりしなり。

古刀根南岸の一驛亭にして林羅山の『輿馬經過糟壁村、秋風悪客不開樽』と吟せし武州糟壁は鈴木久が初めて呱呱の聲を揚げし處、代々土豪にして阿兄を兵右衛門といひ、家には相當の資産あれども、鹽踏みの爲め幼時綿紙問屋に

奉公し、長ずるに及びて笈を東京に負ひ、早稻田専門學校に入る。然れども學問は彼の目的にあらざれば在學中殆んど講堂に出でず、書籍を手につせず、中途にして退學し、長兄兵右衛門の郷里に鈴木銀行なるものを宰し、其支店を日本橋小網町に置けるを以て之に入り、間もなく支店主任となる。彼が初めて相場に手を出したるは明治三十五年にして、夫までは萬更相場氣なきにあらざりしも、之を實行する程の機會と勇氣となかりき。然れども若し彼に相場の手解きを爲す者なくんば、或は今日に至るまで相場の甘い辛い味の味を解せずして、一無名の鈴木久たるに終らんのみ。三浦逸平は即ち彼の手解役なり。

下

三浦は鈴木久に説くに相場は一攫萬金の快心事なる所以を以てし、自己の實

驗を語るや、鈴久は初めて其氣になり、三浦を參謀として場に打て出でたり。彼の一族は屢々彼を膝下に呼付けて苦諫したるも、鈴久の着々儲け出すを視て叱つた兄の兵右衛門も、叔父の善五郎も遂に同じ木乃伊となり、日露戦争酣なる際の如き、小網町に於ける銀行支店は恰も鈴木一族の相場事務所の如くなれり。

由來鈴久は思慮も定見もなく、又非凡の才幹機略あるにあらず、謂はゞ暴虎憑河の猪武者にして、圖に乗れば前後左右を顧みずして進むの馬鹿度胸あるのみ。彼が日露戦争の狂熱相場に於て奇利を博し、は此向ふ見ずの遣口の偶然の中したるもの、恐らく初めより豫期せざりしならん。故に鈴久を以て頭からの思惑師といふは當らず、恰も富籤の中れると其揆を一にせり。

鈴久が狂熱相場に於て贏得たる所或は千萬圓といひ、或は五百萬圓といひ

世説の一定せざれど、兎に角成金中の儲頭たりしは疑ひもなき事實にして、忽ち國中津々浦々の果にまで傳はり、談黒木、東郷、廣瀬等の武將に亘らずんば則ち鈴久に及び、兒童走卒も尙且之を口にし、東京の某新聞の如きは彼の小照を紙上に掲げ、三日に亘りて彼の意見を紹介せり。鈴久たる者豈に調子に乗らざるを得んや。

當時鈴久の最も力を傾倒して買込めるは鐘紡株なりき。然るに三十九年秋漸く深からんとする時、神戸の清商にして一種の辣腕家と稱せらるゝ吳錦堂は突如として鐘紡株を賣出したれば、數日を出でずして五十圓安に低落せしめき。鈴久は狼狽爲す所を知らず、終に思案に窮して拱手茫然たるのみなりしが、帷幄の策士三浦逸平は内に在ては彼を鼓舞し、外に在ては財界の有力者を説きて或は株を持たしめ、或は之を買はしめたり。今一段下落せば無慘

の往生を遂ぐべかりしに、三浦の籌畫忽ち効を奏して漸次氣配を恢復し、四十年には三百圓以上に暴騰して、鈴久の財囊は彌が上にも膨脹せり。

小人凡夫は慾を得れば即ち喜び、慾を失へば悲む。危機一髪の間、失敗を防遏し得たる鈴久は慢氣と自惚心と日に長じて卑むべき當屋根性を發揮せり。或は到處に豪遊を試み、淫蕩沈湎一夜の宴に數千金を散じ、或は某處の會合に於てゲンナマ三萬金を投じて指環を購ひ、傍人をして側目驚嘆せしめたり。彼れ一夜新橋に飲む、來る所の佳麗皆教坊の選、耳漸く熱するの時彼は俄に起ちて懷より數束の紙幣を握出し、一人八百圓宛の割當にて總花を撒くや満座の妓皆驚き且怪んで容易に手を出さず、鈴久乃ち壯語すらく、『是はお前達の爲めに俺が總體百株丈け買った所が儲かつたらお前等に與るのだ、遠慮をしないで取つて置け』と。斯くの如く首都の教坊に成金風を吹かして札びらを

切り、汰侈驕奢、馬鹿の限りを盡せる中に彼の衰運は漸く崩せり。四十年一月は最も高値の時代にして、以來車の坂を降るが如く下落し、満都の櫻花凋落して眼に青葉を見るの頃、鈴久は一文なしとなりき。或は妻妾の名に依て銀行に預けたるもの尙三十萬乃至五十萬ありと傳へらるゝも信じ難し。

代議士の肩書は彼の全盛時代を買得たるもの、由來此種の人物が政治上何等の意見目的あるにあらずして唯だ虚名の爲めに議席を汚す、議會其物の爲に悲むよりも寧ろ其滑稽を笑はずんばあらず。況んや彼が萬國議員會議に列するの運動を爲したりといふに至りては噴飯の甚しきもの、鈴久に依て代表せらるゝ衆議院は何たる幸福ぞや。近者彼れ稍々活動の餘地を得たりと傳へらるゝも到底昔日の勇氣なく、全く世間より忘れらる。蓋し伶俐では相場が出来ず、嚮に鈴久の糞度胸ありしは餘に伶俐ならざりしに因るも、大痛撃の

爲めに怯氣の催すと共に、何程か智惠の附きたればなり。

細野次郎

世間細野次郎を以て最近に於ける成金の一人に數ふ。彼が相場に於て果して何程を羸得たるや知るべからざるも、鈴木久五郎は一蹶復起つ能はず、松下軍次、三浦逸平は近來飛離れたる大儲けに有附かざるに反し、獨り細野は近年他の何人よりも最も順境なる投機界の寵兒とす。

細野の生地は群馬縣、歳十六郷關を辭して東京に出で、叔父澁澤喜作の家に寄食して或は三菱英語學校、或は高商の前身たる商業講習所等に學ぶ。喜

作は彼に勸むるに實業家たらん事を以てしたるも、彼は辯護士を希望して大學選科に入り、學ぶこと二年、辯護士の状態を目撃して急に厭嫌の情を催はす。斯くの如く二十四五の交は職業の目的毫も定らず半途にして學業を廢しき。彼れ以然らく、權勢に阿らず、世論に媚びず、虚言を吐かず、何等檢束せらるゝなくして世を送らんと欲せば百姓か相場師となるの外なしと。斯く左思右考せる中、適く姉婿某古河市兵衛の重役にして鑛山業たりしを以て、細野は鑛山に關する智識を得、且つ大に趣味を解するに及び、鑛山師も亦山に入つて獨立獨行するの業なれば、些か理想に近きものありとし、明治廿一年福島縣沼尻の硫黃山を買收して發掘したるも、事豫期に反して一時休山の止むなきに至る。而も苦心經營の結果、漸く確實有利の域に達したれば、夏期を山中に送り冬は山を出で、政治運動を試み、一時は大得意なりき。然る

に三十三年の盛夏、硫黄山噴火し十三年間の苦心纒に三十分にして水泡に歸し、而も人を殺すこと八十餘。

是より先き彼は父祖傳來の富を盡く山に投じたれば、今は全くの無一物、残るは唯だ五萬金の負債のみ。他の事業に従はんにも資本なく、去とて月給取りは最初の目的にあらず、終に投機界に身を委ぬるに至る。然れども本來の志望は政治にあり。故品川彌次郎と川上操六は彼が知己の感を爲せる人物にして、常に彼に説くに政治家の事業と相俟たざるべからざる所以を以てせり。嚮に彼が鑛山生活を爲して政治上の運動費を山より持出したるも之が爲めにして、今また相場師となりしも畢竟此見地に出づ。

彼は投機を以て危険とすると同時に危険の事業は卑むべきよりも寧ろ尊重すべきものとせり。銀行業者より視れば相場師は信用すべからず、然れども

銀行屋の信用せざる者總て卑しといふ理なし。楠正成の手形を割引したる銀行は破産し、逆賊足利尊氏の手形を割引したる銀行頭取は或は華族に列せられん。蓋し營業上よりいへば尊氏の信すべくして正成の信すべからざるも、而も金貸に嫌はるゝ正成の人格、尊氏の下に在りとは謂ふべからざるなり。此信念より彼は自ら人格ある相場師を以て任じ、敢て他の卑屈に倣はず。過去兩三年間、株大下落の時は常に賣に廻り、暴騰の時は買方となりて巧に戦ひ、伊藤公の哈爾賓一撃に際して安く之を買戻せり。

彼は能く遊び能く散じ、嘗て河野盤洲の臺所を受持ち、阪本金彌、大竹貫一に萬金を融通し、櫻田倶楽部の經費を負担し、鹿を中原に争ふこと前後四回、當選すること三回、政界の餓鬼大將にして又流行兒を以て知らる。且つ近者八萬金を投じて平岡熙の邸宅を購ふ。盛んなりと雖も、金力の價值は大

に得て大に散じ、而して之を活用するにあり。單に自己の快樂の爲めのみに散せず、更に膽を大にして民間の志士論客の窮せる者を救ひ、勢力を伸すの策に出づれば、細野たる者政界に事を爲すに足らん。

快男子西本國之輔

鐵は火を起すも鉛は煙をだも發せず、人の事に於ける亦斯くの如く快男兒世に出で、初めて痛快事を視るべし。今や天下現狀に飽くの久しきも、容易に凡調を破らざるは何ぞや。之を政界に視よ、不人望なる桂内閣倒れて西園寺内閣生れたるも、人心之が爲めに新ならず、寧ろ其の前途を悲觀する者多

し。政黨主義を抱持する政友會と閥族と相一致すべからざるは當然の理なり、苟くも憲政に忠ならんと欲せば夙に一快戰を試むべき筈。若し客秋の政變を以て閥族と一戰の結果なりとせば、國民の同情は翕然として政友會に嚮ふのみならず、局面の一新亦期して待つを得べし。然れども斯るは愚劣極まる情意投合の結果にして豫定の行動を取りたるに過ぎず。事に奇なくして活氣の伴はざる偶然にあらず。

更に國民黨の現狀を一顧せよ、見る影もなきの狀なれども、舉黨心を一にして起たば、猶閥族と政友會の爲めに一敵國たるのみならず、頽勢を挽回して天下を取る必ずしも不可能事にあらず。而も一貫の主義を以て飽まで敵黨と闘はんと欲するある一方には、多年砥勵せる名節を抛ちて官僚の一派と通同する者若くは通同せんとする者の内を惑亂するあり、爲めに内を整ふるに

急にして外に向て意の如く活動する能はざるの憾なからず。斯くの如く活動の本源たる政黨の惰眠を貪れる以上總ての政治は活動せず、隨て陸海軍も財界も教育界も宗教界も平凡を極むるのみ。殊に不良勢力を以て満たさるゝ陸海軍の現状を打破せざるべからざるは識者の夙に待望して已まざる所なり。

昨年大佐太田三次郎の軍政改革論を發表するや現状に不満なる國民は空谷に跽音を聞きたるが如く喜びにき。之を導火線として陸軍よりも改革家の出現すべき筈なるに出現せず。蓋し海軍の太田に對するものを陸軍に求むるに中將東條英教あり、黒澤源二郎あり、少將伊豆凡夫あり、其他少將大佐級にして滿腔の不平を今の長閥に抱く者少からず。去れども東條といひ黒澤といひ世間の買冠りたる程に氣骨の見るべきなく、殊に伊豆の如きは硬骨を以て知られたるに、事の實際は頗る意氣地なきが如し。唯だ太田の時を隔つる一

年にして漸く快男子の陸軍より出で、憚る處なく陸軍の改革を絶叫し、世人の意を強ふす。其人は即ち西本國之輔。

西本の陸軍に於ける七八年間は長閥軍人との戰鬪史なり、眞にローマンチックなり。彼は廣島の産、二十九年幼年學校を出で、士官學校に入る。當時より氣鋭にして人に屈せず、二回罪を得て營倉に投せられたるも、學業優等の故を以て常に首席を占め、卒業も第一位たりしが、同級生相會して撮影するに際し、劔を頬に當て、俯首したるは宮殿下の前とも心得ざる不都合の態度なりとて退校處分を受くるの運命に立至りたるも、居中斡旋する者ありて校長の面前に陳謝し漸く免れて廣島師團の隊附士官となりて赴任せり。去れど少尉時代より長閥の勢力に反抗せんとするの氣充滿したれば自ら長官の覺えも悪しく、常に左遷されたれば益々不平の昂まり、終に聯隊長大佐木村

重と衝突し、辭職すと稱して一箇月餘も出隊せざりき。

今の豊橋旅團長にして陸軍の一人物と稱せらるゝ豊部新作は深く西本を愛して其客氣に失するを訓戒し、廣島聯隊附少佐より教導團區隊長に轉じたる時西本を伴ひて區隊附としたれば、西本も豊部の知遇に感激して心機頓に一轉し大に奮勵せり。

然るに不幸にして豊部は金澤聯隊長に轉じ、其後任となりたる少佐齋藤久助及び他の區隊長佐伯岩次は純長人にして西本を遺瀨なきまでに窘め、汝は廣島人にあらずや、生意氣をいふも駄目なりと罵るに至りたれば、西本は憤慨措く能はず極力反抗したるも、長閥勢力の騎兵隊に入れることゝて殆んど孤城落日の有様なり。一日彼は齋藤と大衝突をなし、夜に入て白衣を著り七首を懷ろにして齋藤を刺さんとしたるも、團長大佐小幡蕃の切止する所とな

りて遂に事なきを得たり。彼は到底陸軍に曠足を伸す能はずとし、劍を抛ちて海外に遊ばんと考思せる中、閥族政府倒れて大隈内閣となりたれば大に意を強うし、身を政界に投ずるの準備として軍政を修めんと欲し、陸軍大學の選拔試験を受けて合格したり。桂の山縣内閣の陸相たるに及びて教導團を解散し、齋藤は騎兵實施學校教官に轉じたるも、順序よりいへば當然士官學校教官たるべき西本は習志野騎兵旅團中隊長に遷され益々不平に堪へず。既に澁谷在明聯隊長として習志野に来るや大に西本を信じて副官とし、三十四年彼の爲めに保證人となりて陸軍大學に入らしむ。

大學に入る者は概ね自己の位置を作るを本位とするが故に學生と教官の間に懸隔あり。同じく太尉なるも教官は權力を有するに反して學生は低頭阿附するを專一とし、甚だしきは教官の一叱を受けて泣きしあり。西本は大學に

於ても常に反抗性を發揮したれば教官の嫉視する處となり、遂に二學年の末期に於て時の校長藤井茂太は彼に退學を命じたり。去れど彼はさる理由なしとして校長の命を肯かず、退學辭令を突戻すこと二十餘回に及ぶ。時に澁谷は騎兵監として東京にあり、一夕西本を呼び、曩に吾子を大學に推薦したる關係上余にも多少の責任あり、余が騎兵科にある以上暫く恥を忍びて留任せよと懇説し、且つ夫人を媒妁したる中將豊島陽藏も言を盡して忠告したり。是より先き彼は大隈伯に面して早稻田大學に入るに決して大學の筆記も書籍も舉げて同郷人に與へたるも、澁谷の恩誼に背く能はず意を翻して再び習志野の騎兵第十聯隊に赴任せり。時の聯隊長杉浦藤三郎は彼を遇する恰も友人の如くなりしより何程か不平を慰め、間もなく日露戰爭に會して動員を行ふや彼は補充獨立中隊長となり、大佐森岡正元新たに留守補充大隊長たり。森岡

は土佐人にして前年少將を以て豫備に入りしが、馬術の點に於ては我騎兵科中の第一人と稱せらる。資性頑強にして争辯ある西本と相似たるを以て兩雄並び立たず。森岡は馬術を以て西本を苦め、或は馬匹徵發の任を命じ、其爲す處頗る酷なるより西本は時の第一師團長矢吹秀一に面して森岡を彈劾したるも要領を得ず、更に騎兵監大藏平三に行き森岡なり余なり孰れかを處分せよと迫れり。森岡は此事を耳にし、羅織して西本を誣ひたれば、終に三十七年を以て停職處分を受くるの餘儀なきに及ぶ。

然れども斯かるは西本の初めより豫期したる處なれば毫も驚かず、況んや私財豊かにして終生遊ぶも衣食の憂ひなきをや。彼は一世を驚かすの舉に出でんとて窃に畫策する處ありしも、腰拔軍人多き爲め實行する能はず、斷然國民黨に投し過る總選舉に郷國より候補に立たんとしたるも、親戚の諫止す

る處となりて果さず、東京に在て同志の爲めに極力盡力したり。彼は官纒に騎兵大尉に過ぎざるも、不良勢力の下に祿を食むを快しとせず、陸軍改革の陳涉吳廣を以て任じ、後の賢者を待たんとす。其言爲何程か矯激に失するの嫌なからざるも、其意氣眞に壯とすべきなり。

袁世凱及び其幕僚

一

武昌の新軍一たび起ちて革命の火を點するや、常に機に乗すべきを窺ひたる各省の革命黨は踵を接して崛起し、其勢ひ恰も燎原の火の如く殆んど底止

する處を知らず。蓋し支那の革命は元と自然の勢ひに出で、今年勃發せざるも必ず孰れの時にか勃發すべく、歳久しく漢人の腦裏に深刻したる倒滿興漢の思想は如何なる手段を以てするも到底滅し去る能はざるなり。唯だ勢ひの那邊にまで立至るべきや未だ容易に逆賭する能はざるのみ。

陳涉吳廣出で、項藉劉邦亞で起る。這回の擧之を從來の革命騒動に比すれば事體重大なれども謂はゞ序幕にして、黃興や孫逸仙や黎元洪や陳吳たるに過ぎず。更に漢族の全體を統一すべき大人物現はれて天下のこと始めて定まるのみ。去れど三百年間威福を弄したる滿洲朝廷は最早事實に於て傾覆したるなり。然るに滿廷の大官重臣は何の體たらくぞ。社稷の祀將に絶えんとする此危機に際して、一人の義士憤を發する者なく、罪を幼沖の天子に歸して億兆に謝せしむ。昔は燕、齊を伐ちて七十餘城皆燕の有となる。適と王蠋起

ちて節に死するに及び七十餘城復た齊の有に歸す。唐の安祿山叛して漁陽の鞞鼓地を動かし來るや、河北二十四郡守を失して祿山に降らざる者なし。唯だ一人顏真卿の勤王を唱ふるに及びて諸郡多く之に應せり。蓋し滿廷一人の倡を爲す者あらば滿人風を聞て誰か之に従はざらんや。

協理大臣那桐の如きは當然皇家の爲めに奮起すべき筈、而も屏息して一身の安きを貪ぼるのみ。蓋し彼は周旋の才あるも到底大事を擔當するの器にあらず。唯だ今日の美官を得たる前には李鴻章に取入り、後には巧みに慶醇二王に附攀したる爲めのみ。獨り南京巡防隊長張勳なる者革軍をして一步たりとも城内に足を入れしめず、進んで既陷の地を恢復し叛徒を掃蕩せんと豪語して盛んに虐殺を行へり。張や人格劣等の一漢子のみ。其爲す處狂暴にして忠誠の資なく、滿人彼に従ふて起つなしといへども、之を夫の辟易懦恐策の出

づるなき者に比すれば其頑剛尙珍とすべし。然れども官軍は既に鼎の輕重を問はれ滿廷の威信全く地に墮ち、革命黨の勢ひ益々振ふと共に軍隊の奏議、資政院の要求日毎に加はり唯だ命維れ従ふの外なからんのみ。三たび上諭を發して袁世凱を起用するの餘儀なきに至れる、窮するの餘に出づるも、一旦三行半を渡したる舊妻を想起して再び家に入るゝと同じく、滿廷人なきを證して餘りあり。家亂れて良妻を想ひ國歩艱にして忠臣を思ふとは古來支那人の口にする處、袁は果して清國の社稷を負荷して立つの大人物なるか。

袁は河南の産、家は彰德府に近き陳州の項城縣にあり。可なりの門閥家にして叔父袁保齡は嘗て天津道臺たり。袁は夙に才氣の尋常人に過ぐるあるも放蕩無賴の爲め郷黨の指彈する處となり、殆ど夜逃同様にして天津に赴き叔父の家に寄食し、官場の人たらんとして叔父の紹介を以て時の山東提督吳

長慶を訪ひ其配下となる。時に張騫は吳の家庭教師たりしを以て袁も亦彼に従ひて學を修む。張騫は通州の人、家富み學深く私費を投じて學堂を起し公共事業に盡瘁したるを以て地方に名望あり、隱然政界に重きを爲し他日人材を擧用するの場合必ず出づべき一人なりと稱せられしが、果して袁内閣に入て農商工部大臣となれり。吳は夙に袁保齡と親交あるのみならず袁世凱の物の用に立つべきを認めれば、駐兵大臣として韓國に赴任するに際し彼を伴へり。當時一下級武官に過ぎざりし袁は京城に於て一廉の手腕を示したれば、益々吳の信頼する處となり、殊に當時吳の帷中にありし馬建忠、馬良等も有爲の材なりとして袁の爲めに先容をなしたれば故李鴻章亦大に矚目し、袁を抜きて欽差大臣とし清韓外交の事を擔當せしめき。

彼の京城に在るや、巧みに事大黨を操縦して清國に頼らしめ、以て我邦の勢力を半島より驅逐せんと試みたり。或は荆軻聶政の徒を放ちて朴永孝一派の日本黨を暗殺せんとし、或は詐術を以て金玉均を上海に誘ひ、終に非命の最後を遂げしめたる、其張本人は即ち彼にして、時の日本公使大島圭介の如きも毎度彼の爲めに苦められたり。

二

日清戦争は即ち彼の勢ひを鷓張したる結果にして、之が爲めに清國は北洋水師を失ひ臺灣を奪はれ、滿身の瘡痍容易に醫す能はざるに至れり。當時袁は呆々の體にて朝鮮を逸出し、五分間の違ひにて飛ぶべかりし首を繋ぎ得たり。此失敗の爲め李鴻章の激怒に觸れて忽ち革職せられ、暫く身を躲せり。去れど此儘に埋木となるは彼の忍ぶ能はざる處、乃ち李爺の餘憤消ゆるを待ち、友僚を介して罪を謝したれば李の意漸く解け、再び彼を用ゐて軍務處文

案とせり。當時李は陸軍再興の必要を感じ、袁を練兵官として新兵訓練の任に當らしめたり。是れ彼が陸軍に勢力を扶植するの嚆矢にして、兼ねて又他日大に顯達するの端緒を開けり。

既にして直隸按察使、布政使を歴て山東巡撫に進む。山東省には總督を置かず巡撫に與ふるに總督同等の權能を以てし、此に巡撫たる者他日必ず直隸總督となる。彼の山東に在るや兵勇を募りて之を訓練し、三十三年拳匪山東に蜂起するや、之を擊攘して隻影なからしめ専ら意を外人保護に用ゐたり。義和團戡定後に於ける善後策は滿廷の最も苦心したる處、第一の急務は事を措辨すべき適當の人物を得るにあり。是に於て白羽の矢は袁に立ちたれば、意氣揚々山東を出でて直隸に入り、保廷府に在つて列國使臣と折衝せり。此時よりして彼は政治的勢力の上に一步を進めたり。既にして直隸總督を以て

北洋大臣を兼ね、間もなく張之洞と共に軍機處に入り、處政を宰すると共に北洋新軍六鎮の彼の節度に服するあり。所謂入つては則ち相、出ては則ち將、政權兵權殆んど彼の掌中に歸し、一時は得意の最高潮に棹せり。

四十二年秋西太后光緒帝並び崩じて醇親王攝政となるや、忽ち反動は來りて積年の勢威忽ち落ち漸く身を以て遁るゝに至れり。蓋し此失意失脚は獨り政敵の報復手段のみならず其由來する處自ら別に存するが如し。蓋し袁は野心の結晶體にして野心を遂ぐる爲めには如何なる惡辣手段も殘忍酷薄の所業も敢て辭せず。其人格の下劣なる點は殆んど市井の無賴と異ならず、唯々狼心を包むに羊皮を以てせるのみ。曾て光緒帝は康有爲、梁啓超等の議を容れて變法自彊の策を行はんとす。時に袁は直隸按察使たり。彼も亦康梁一派と往復して其計畫に賛成し、兵力を貸さんことを矢ひたれば康一派は袁を以て正

に我味方なりと信じたりき。然るに袁は當時滿廷に於て専ら事を用ゐたる守舊黨の首領榮祿に漏らすに改革派の密謀を以てし、榮祿之を西太后に告げれば、光緒帝は忽ち宮闕の一室に幽閉の身となると同時、康一派は危機一髪の間、身を以て日本に免れたり。先帝は之が爲めに憂憤病を發し、康梁等は志業全く蹉跎して此恨綿々とし一盡くるの期なし。之に反して先帝及び志士を賣りたる二股武士は滿廷無二の忠臣として西太后の寵幸日に加はり、皇帝の忠臣は袁の肉を啗ふも慊らざる程に憎惡したるも、西太后垂簾の政を爲すあり、殊に袁の勢力大なるを以て如何ともする能はざりき。

西太后の崩殂は確に袁の打撃なりき。忽ちにして宮中の一角より袁排斥の聲は起り、從來袁と相善らざりし醇親王出でて攝政となるや、當時袁の部下にして新軍の統制官たりし張某は樊噲を氣取りて滿廷を脅威したるも、袁を

四面楚歌の境より救ふ能はざりしなり。是より先き袁の直隸總督たりし時、獨人ハンネツケンと親善の關係あり。此漢は日清戰爭の際講和使として來朝したるも、無資格の故を以て追ひ返されたる一箇の半紳半ゴロのみ。彼れ新邸を天津に築き一日官吏紳董を招きて披露の宴を張るや、袁は主賓として其席に列す。宴酣なる頃ハンネツケンは袁に對して「總督閣下今我れより皇上の禮を受けよ」と拱手屈膝の禮を爲すや、袁は莞爾として得意の色あり。此事何日とはなく宮中に傳聞し、袁は皇位を窺視すとの疑ひを懷く者多かりき。果して袁にさる大望ありしや知り難きも、是れ豈に彼の宮中より呪咀されたる一原因たらざるを知らんや。當時一易者ありトして曰く、若し袁にして今日以上のものを望まば其首必ず飛ばんと、袁之を聞て大に怒る。後ち失意の境に沈淪するや、始めて易者の豫言を想起し、人を派して百方搜求したるも

遂に行く處を知らざりき。

三

其後袁起用の議は屢々出でたれども、宮中及び政敵の沮止する處となりて起つの機會を得ず。彼は河南の舊廬に隱栖して晴耕雨讀を事とし、或ひは一竿の風月を娛みて表面他意なきを装ひたれど、満々たる野心の火は胸中に燃えて夢魂常に燕京に飛びにき。

此次革命黨の崛起は袁に取つては恰も棚から牡丹餅の觀なからず。蓋し彼は之に依て再び政界に乗出して失勢を挽回するの機會を得たればなり。唯だ彼の不安心なる點は初め單に湖廣總督として革命黨を鎮定せよといふに止まり、權限の未だ充分備はらざるにあり。蓋し廢昌は陸軍大臣を以て征討軍を指揮し、薩鎮冰は海軍を統率す。袁如何に機略あるも兵權を有せずして浮々

飛出せば失敗するやも測られず、失敗せば再び鹹らるゝの運命に遭逢するなきを得ざればなり。是に於て袁は上諭再三下るも脚疾に藉辭して飽まで横著を極込み北京朝廷を焦せり、蓋し彼の意、此間に實權を收めて確實なる地歩を占むるの計を爲すにあり。而して彼の舊幕僚は袁の意を體して盛んに裏面の活動を試みたり。袁が形勢を觀望せる間に北京の政局は急轉直下して或は灤州第二十鎮の新政奏議となり、或は資政院の大活動となり、總理大臣の任命となり、袁は坐ながらして高く天上に押上げられたる形なからず。或は曰く資政院の活動は袁の爲めに計りたるにあらず、實は斯くして袁の兵力を奪ひて單身北上せしめ一舉に葬り去らんとするの策に外ならずと。されど事の甚だ疑はしく、袁の初めより之を操縦したりといふの寧ろ事實に近きが如し。資政院のいへる如く果して鐵道國有政策の爲めに人民の反抗を招き、禍亂の

因を爲したりとせば、是れ獨り盛宣懷の罪のみならずして總理大臣慶親王、協理大臣那桐も當然其責なからず。而も盛の彈劾に死力を傾倒したるは何ぞや。

蓋し袁の往年朝鮮に失敗して野處落托するや、李鴻章をして再び彼を用ゐしむべく居中週旋の勞を執りし者は盛宣懷と胡燏芳なりき。而も盛は到底袁の藥籠中の者にあらざるのみならず、郵傳部大臣として辣腕を揮へる以上、己れの爲には當面の邪魔者なり。故に袁の意慶親王、那桐は切るに切られざる干繋あるより飽まで之を庇護し、罪を盛一人に歸して革職するにあり。資政院が袁の傀儡となれる即ち此一事を以てするも明ならずや。斯くの如く彼は自己の利害の爲めには恩人の首を刎ぬるを辭せざるなり。されど第二十鎮統制趙紹曹は初めより袁の傀儡にあらず、寧ろ彼と覇を争ふの意ありしが如

し。張の兵を率ねて北京に入らんとするや、袁は直ちに滿廷をして彼の職を免せしめ、代ふるに部下の潘某を以てしたり。初めは脱兎の如くなりし張の後に氣勢の揚らざるは兵權を奪はれたるに因るも、一は袁の爲めに軟化されたるに非ざる乎。

初め袁の總理大臣を辭して容易に北上するの色なき、尙ほ北京の暗流己れに不可なるありとしたるが爲ならんも、既に入觀したるからは萬更胸中無一物にあらざるべし。然るに總理の職其任に耐へず、別に賢良を選べと固辭し然らば何人か其任に堪へんと問へば黙して答へず。意あるが如く意なきが如く、怪物の眞意果して那邊に存するかを疑はしめき。蓋し袁としては此場合新内閣を組織して國是を一定するか、若くは革命軍に投ずるの外策なし。されど彼は北京朝廷に叛きてダントン、ロベスピールとなる程の膽略なければ、

結局前者を選ぶべしとは何人も其見を一にしたり。

果然彼は内閣組織の命を拜し、才學短淺にして重寄に報ゆる能はざるを恐るも、世々國恩を蒙るを以て當に驚鈍を竭して馳驅に任ずべきを言明したり。唯だ問題は紛糾せる時局を救ふべき成案如何にあり。初め出慮を決したる時、彼は武漢のみを中心として觀たるが故に、一兵を交へずして局を結ぶ易々たるのみと思惟したるらしきも、其後の形勢甚だ可ならざるあり。蓋し直隸總督たりし時、彼は革命黨に秋波を送るが如く見せて、其實盛んに迫害を加へたる陰險奸譎の手段は革命黨の大に憎む處、殊に新政府は滿漢聯立内閣にして革命黨の理想と距離甚だ遠きを以て如何に肝膽を碎くも交綏の途なかるべし。嘗に革命黨の敵視するのみならず、彼の腹背には幾多の政敵あり。即ち滿人は慶親王、那桐等の我味方たるに過ぎずして三千の旗人恐らく彼を喜ばざるべし。

るべし。

四

漢人中岑春煊、趙爾巽、瞿鴻機、林紹年等の系統に屬する者皆袁の背德を惡む。殊に岑は袁の向ふを張るに足るべき支那政界の大立者にして曾て兩廣及び四川總督たりし時、民を治むるに德を以てしたるが故に、皆神の如く崇め父母の如く悅服せり。

前年郵傳部尙書たりし時、慶袁一派の專横私曲を憤りて彈劾し、寧んぞ能く小朝廷に處りて活を求めんやの意氣を以て野に下れり。唯だ袁の如く執著力なきも清廉骨硬にして至誠國を憂ふるの志に至つては袁と同一に見るべからず。

袁系統と稱せらるゝ者の中錚々の名あるは徐世昌、梁敦彥、唐紹怡、段貴

瑞、段芝貴、陳夔龍、張人駿、汪士珍、趙秉鈞の徒にして中に就て唐趙二段は袁の四天王と呼ばれる。徐は趙爾巽の前に東三省總督たりし時、袁の旨を奉じて日本に不利益なる態度を執れり。人と爲り其面貌の如く圓滿にして如才なく相當に手腕もあるらし。梁と唐とは袁派中の新智識者にして一は獨逸に心酔し、一は多年米國に留學して親米派の隨一たり。親獨親米主義の洗禮を袁に授けたるは主として此二人者とす。

唐の倨傲にして無愛嬌なる原敬を支那人にしたるが如し。彼れ常に曰く、日本は今日こそ東洋第一の文明國なりと誇稱するも、三十年前は纔に東京横濱間に汽車の通せるのみ、何ぞ他を笑ふを得んやと。以て彼の對日思想の如何を知るべし。段芝貴は巡查上り丈けに人格劣等にして且奸智に長ず。嘗て天津の女優を落籍して振貝子に獻じ、依て以て一道臺より吉林巡撫の職を贏

得たり。當時岑春煊は之を陋なりとし御史趙啓霖をして彈劾せしめたり。趙秉鈞は袁年來の腰巾着にして其密切なる殆んど宗族に等し。袁の全盛時代は官纜に民政部左侍郎に過ぎざりしも、其勢力大臣督撫を壓し、恰も伊東巳代治の内閣書記官長を以て伊藤博文の下に威勢赫々たりしに似たり。袁失脚と同時に彼は竊かに鴉片を喫したりといふの一事を以て革職に遭へり。此次袁内閣の民政大臣となれる即ち當然の結果にして袁の用意の存する處を窺ふに足らん。蓋し民政大臣は我邦内務大臣の權限の一部と、警視總監以上の警察行政權とを有するを以て軍隊以外一切の政敵に對して施爲する處あるべく、即ち北京内外に於ける治安の策に當る者として其人を得たる者ならん。要するは袁は權謀術策に富むも徳を以て人心を感孚せしむるなし。皇太后攝政王等の舊怨を忘れて彼を起用し、托するに經國の策、大局の保全を以てし

たる、猶ほ劉備の自ら枉屈して三たび孔明を南陽の草廬に顧み、諮るに當世の事を以てしたるに似たるも袁には一點忠誠の心なきなり。彼は自己の權勢を確實にせん爲め、徐に皇帝退位の計を廻らし、一面には革命黨を軟化し、妥協を試み、遂に共和政府を立て、自ら大總統となれり。袁と孫逸仙との間には初めより黙約ありて八百長の大芝居を打ちしや、或は百五十萬圓を孫に、百萬圓を黃に啗はし、黎元洪の如きは當初より袁の藥籠中にありしや、具さに知り難きも、革命の擧が世界を騒がしたる程にもなく龍頭蛇尾に終りしは彼等に同情したる者の失望せし處なり。

或は曰く袁の共和制を實施したるは一時の權宜にして實はナポレオン三世の故智に倣ひ之を踏臺として自ら皇帝たらんとするにありと。袁としてはさる野心を抱かざるにあらざるも、今日直ちに實現せんは四周の事情之を許さ

ざるべし。彼は今日の支那に於て確に北方の雄ならんも、外國人の觀る如く偉大の大物にあらず。唯だ彼が外人の歡心を得るに巧みなる如何にも文明的政治家の如く思はる。而して彼は故張之洞と異り甚だしき無學漢なるを以て、一藝一能あるの士を羅致したると、背後に兵力あるの故を以て何程か買冠られたるのみ。

朝鮮の大立者

上

從來半島の政治舞臺に活動したる韓人にして傑出したるは金玉均、李周會、

禹範善、李逸植等を外にして、纔に宋秉峻、李容九の二人を得るに過ぎず。故金玉均は日韓兩民の間既に定評あり。李周會に至つては多く世に著聞せざるも、王妃殺害事件の發頭人にして初めより親日黨の一人たりしより事大黨の爲めに罪を獲て全羅の一孤島に流謫せらる、朝鮮人としては珍らしき正直者にして、慷慨義に走り従容死に就くの概あり。閔妃の變、下手人を出すに際して彼の爲めに惜む者少からざりしも、彼は従容として名乗り出で終に死刑に處せらる。

禹範善も亦餘り日本人に知られざる豪傑の士とす。今日鮮人間に社會主義的思想を抱き、常に日本に好情を寄する者は多くは彼の門下生にして、其思想と勢力半島内に踞居せり。若それ李逸植に至つては宛として三國志的の策士にして、露國黨活躍の筋書は多く彼の手に成る。其他李根澤の怪傑と稱

せられ、李完用の辣腕家と稱せらるゝも、此種の人物は飽まで朝鮮式にして珍とするの人格にはあらず。去れど李完用、宋秉峻、李容九の三人は最近に於ける漢城政局の樞軸を握り、日本が統監政治の實績を擧ぐる上に初めより直接の關係ありしのみならず、日韓兩國の根本的解決の際にも活動したれば兎に角朝鮮の大立者と稱して可。

李完用は兩班の出、明治二十八年露國黨内閣に入つて學部大臣たりしまで外交官として久しく米國に駐劄し、其後駐日公使たりしも終に任に赴かずして已みにき。會て李範晋、李允用等と結びて親日黨を壓迫し、金弘集一派を殺して内閣を乗取りたるが如き、韓人特有の陰謀の血は彼の脈管に流る。彼が朴齋純内閣の一軍務大臣より抜かれて内閣の首班となりしは主として第一世統監伊藤の盡力に出で、而して伊藤の意、彼を以て首相の器としたるよ

りも時の皇帝が自己の便利なる内閣を組織するの計畫を抑制し、兼ねて彼を統監政治に服従せしめん政略に外ならざりしなり。蓋し彼は自動的政治家にあらずして飽まで他動的なり。何となれば從來彼の畫策すところ必ず其背後に主動的人物ありて之を援け、未だ嘗て自己の腦中より割出したるにあらざればなり。明治二十九年春川の亂民京城を襲ふの風説傳はるや、時の内閣と時の露國公使ウエーベルと結托して國王父子を露國公館に連込みたるは表面李完用に依て企てられたる如きも、實際の計畫者は李逸植にして、李完用は畢竟一の傀儡に過ぎざりしなり。

保護政治の幕を開ける明治三十八年の第一次日韓協約に對し、彼が一學部大臣を以てして眞先に署名せしも亦彼の自意にあらずして、外部の壓迫に餘儀なくされたるのみ。當時彼の眞意甚だ疑はしきあり、乃ち一進會は彼の邸

第の小屋に火を放ちて先づ危險に陥れ、説くに日本に頼るべきを以てし、彼の決心を早くせしめたるなり。彼が一進會と氣脈を通じ、著々功名を收めたるは此時に始まる。要するに李完用は韓人の結晶體にして、日本人の眼に映する如く非常なる手腕家にあらず。

中

王位禪讓問題は半島の歴史上破天荒の出來事に屬する固よりのことなるも一面より視れば滑稽劇にして又一面に於ては一閃の悲劇なり。而して此事李完用一人の力にあらず、主として之を畫策したる者は宋秉峻となす。宋は其形貌精神俱に全然日本化せる者にして、乃ち日本人を妻とし、好んで日本の風俗慣習を躬行し、巧みに日本語を操り、自ら野田平次郎と名乗る。李完用が名門の出なるに反して宋は威鏡道の僻邑微賤の家に生る。階級的の韓國に

在りては身兩班の出にあらずんば官吏となりて羽翼を伸す能はず、然るに牛賣を父とし蝸甫と呼ぶ淫賣婦を母とせる彼は金を以て宋姓を購ひ、初めて故大院君に仕へたり。去れど彼が風雲に際會するの時は容易に至らず、日清戰爭後日本に奔りて北海道、京都、岡山、山口等に轉々放浪すること十餘年、宋の名は未だ日韓兩國の間に重きを爲さざりき。

既にして日露交戦の事あり、機會を掴むに敏なる彼は我十二師團に従ひて韓國に歸り、爾來我軍の通譯及び東道の任に當りて大に日本の爲めに力を盡し、續いて國中の有志を糾合して一進會を創立し、李容九と俱に八道に號令するに及びて其名漸く日韓朝野の間に著はる。李完用内閣に宋秉峻を加へたるは故伊藤が彼に依て一進會の勢力を利用するが爲めなりしは勿論なれども、是れより先き既に一進會に眼を着けたるは木内重四郎にして、宋を伊藤に結

付けたる者は木内と内田良平の二人なりき。是を以て宋と木内とは關係最も親善にして、初め彼の農商工部大臣たりし時も後ち内部大臣たりし時も木内は之が次官たりき。

海牙密使事件の陰謀發覺して、善後策の御前會議を開くや、群臣皆俛首緘口して一人の太皇帝を正視する者なし。獨り宋は敢然として帝の不所存を極諫し、言々風霜を帯び聲淚并び下るの概あり、當時彼の此劇に於ける確に市川團十郎の役廻りなりしなり。會禰の伊藤に代りて統監となるに及び、彼は内閣を去りて東京に來り、李容九と相應じて日韓合邦を叫ぶや、政敵は彼を貶して成上者とし、或は一身の利害の爲めに日本に媚ぶる賣國奴の如く罵る者もありき。然れども彼の意、韓國の日本に抗敵するは寧ろ社稷を覆す所以とし、自家の行動を以て二千萬の國民を愛するの至誠に出づと信じたり。

李完用は由來面従腹非の人、老獺の心術掩ふ可からざるも、宋は朝鮮人としては案外正直漢なり。李は時の勢に乗じて功名を收むるに巧みなるが如きも、畢竟人の禪子に依て相撲を取るのみ。故に事成れば則ち功を己れに收め、失敗すれば忽ち逃ぐ、此遣口は恰も桂と相似たり。彼が人と對談するに當り、指を以て齒を叩き、獅鬚返つて聽く處、其陰險にして猜疑心の深きを顯はす。李の隱忍力に富むに反して宋は此辛棒力なし。是れ一たび李と併び立ちて終に違へる所以にあらざるか。蓋し宋は野武士的性格を具へ、總ての點に於て韓人型より脱せり。彼は利害の打算を後にして感情を先にす、故に感情の高潮に達するや、恰も野猪の如く突進す。李は黒幕に其人を得て初めて成功すべきの人、然るに李逸植、宋秉峻を失ひ、趙重應の如きボンツクを參謀とせる後の爲體は殆んど見るに堪へざりしにあらすや。

下

一進會の會員無慮百萬と稱せられき。曾て韓八道到處一進會を観ざるなく一進會の在る處必ず李容九を説かざるなし、彼の一進會に於ける勢力は部分的にあらずして普及的なり、彼れ一たび足を舉げて天下に號令せば百萬の會衆響應して起ち、皆其命に負かざらんことを期す。此點に於て彼は殆んど活ける偶像なりき。世間或は李容九を以て自由黨の盛時に於ける板垣退助に比する者あり、彼が三寸の舌を揮ひて自由民權を叫び、或は有司の壓迫に遭ひ屢々刺客の難に罹らんとしたる、當時の板垣に似ざるにあらざれど、板垣は自由黨總理たる間に往々曖昧の行動に出で、薄志弱行と視らるゝの嫌ひなきを得ざりしに反し、李容九は鋼鐵の如き信念と、火の如き氣力とを以て目的の爲めに動き、而も衆心を悦服せしめて未だ其人格を議せしを聞かず。到底

●●●板垣輩と同一に語る能はざるなり。

凡そ韓人中波瀾に富む未だ嘗て李容九の如きはあらず。貴族としては最高の老論派に屬し、其富に於ても韓國の文武兩班中未だ彼に及ぶ者なきも、彼は自ら平民の友を以て念としつゝ、愚なる階級制度を打破せんと試み、齡弱冠にして東學黨に投せり。東學黨の亂、彼は黨將崔時享の參謀長にして、八道の野に轉戦し、死生一髮の危機に瀕したること一再にして止らず。此間彼は精神の修養を積み、黨中第一の膽力家を以て知らるゝに至る。若し官吏たるを欲せば難きにあらざりしも、終生官に仕へざるを心誓し、在野黨を以て始終せり。是れ蓋し彼の師事したる崔時享の感化教訓に因るもの、斯かるは權勢病に罹れる韓人中最も珍とするに足る。而して李容九と宋秉峻は意氣最も投合せる政友にして驩憂必ず之を俱にしき。

●一進會は初め李の進歩黨と宋の獨立協會と合併したるもの、前者は東學黨の後身とも見るべく、後者は宋が日露戦争の際日本黨として組織したるものなれど、其頭數に於ては幾十萬の會衆を有する進歩黨に如かず、此二箇の勢力相合して初めて彼が如き大を致し、のみ。此二人は初めより親日主義の點に於て一致せしも、兩黨聯合の動機を造りたる者は孫秉熙とす。李と孫は東學黨時代に於ける莫逆にして李は嘗て死を以て孫の生命を助けしことあり、明治三十七八年の交、孫は日本より書を李容九に寄せて曰く、韓國のこと日露の勢力を利用するに若くはなし、而も裏面に於て多く露國の勢力を藉るの最も得策なるを認むと、李乃ち之を宋秉峻に諮る、宋は半島の形勢十年前に異なるあり、韓國を救ふの途一に日本に頼るに在るのみと論じて孫の意見を排するや、李も亦宋の説を是とし此に合して一となりしなり。初め獨立協會側

の尹始炳を以て會長とし、李容九は地方總長たりしが、尹は人物聲望李に及ばず、輿望は終に李を推して會長の任に著かしむ。

李の風貌溫藉にして應揚の風ある、一見名門右族の出たるを思はしむるも、一たび口を開かば慷慨の辯火を吹くが如し。或は云ふ宋は表面名を出さざるも、一進會の實際的首領にして李は神輿たるに過ぎずと。夫れ或は然らん、然れども百の宋秉峻あるも一人の李容九なくば到底百萬の大衆を纏むる能はざりしならん。乃ち李の名望と宋の手腕と相俟ちて初めて一進會あり、是れ何事も此二人者の商議に依て決したる所以なりとす。日韓併合後一進會は解散し、後ち其年ならずして李は病を以て館を捐つ。蓋し彼は韓國が産出したる近代の最も大なる精神家なりき。

樂界の三天才

女流音樂家の天才と稱せらるゝは幸田延子、安藤幸子、柴田環の三人にして、延子はピアノ、幸子はヴァキオリン、環は獨唱を以て鳴る。延子が東京音樂學校技術監として多年同校の實權を掌握せる、恰も下田歌子が華族女學校學監として久しく同校内に虎視鷹揚したると相似たるあり。殊に四十以上に至るまで獨身生活をなせるより屢々情事を傳へられたる亦歌子と相似たり。唯だ一の異なる點は歌子の稀に見るの美容家なるに反し、延子の醜貌家なること是れなり。

凡そ勢力の存する所必ず中傷非難の伴ふを免れず。延子には味方の多き代

りに機會あらば叩き落して呉れんと窺ひ澄せる敵も少からざりき。本來律呂を論じて八音の調に和すべき洋々たる音楽學校は常に幸田派と非幸田派との間に暗闘を演じて平和を缺きたれど、延子の勢力の牢平たる何人の楯突くも泰然自若として貧乏搖ぎもせず、現に反對派の隨一たる島崎赤太郎の如きは結局撥飛されて南風競はざるの状ありしにあらすや。而して歴代の校長亦多くは延子に手を焼けり。蓋し校長の勢力を以て之を抑へんとせば却て王手飛車を喰ひて自ら學校を去るか、若くは下手に廻りて彼女の鼻息を窺ふの外なかりしを以てなり。蓋し延子は藝術家として非凡なるのみならず、單に一箇の婦人としても偉なるは何人も認むるも、驕る者久しきを保たず、彼女の専横跋扈を憤慨して非幸田派に同情を寄する者逐年多きを加へ、校長湯原元一も亦延子を除くの策を講じたれば、樂界の西太后も時に利あらずして終に滅

らるゝに及ぶ。

幸子は延子の妹にして同じく獨逸仕込みなり、幾多の先輩教授を抜きて延子の次席となりしは畢竟姉の威光に依るのみ。唯彼女が今日まで延子の如く品性上の批難を免れたるは早く配偶を得たるに因るも、女流藝術家が兎角破鏡覆水の嘆あるは何ぞや、幸子の如き、藤井環の如き皆な然り。文學士安藤某が進んで幸子を迎へたるは衷心好求として愛したるにあらずして全く敵本主義より來りしのみ。蓋し彼は豫てより音楽學校幹事富尾木某の椅子を狙ひ、此野望を達する爲め威權赫々たる延子の妹と結婚するに如がすとしたればなり。然れども爾うウマクは問屋で卸さず、目算ガラリと外れたるを以て此の上は醜婦に未練なしと、窃に長崎高等商業教授に轉任し、幸子は終に獨り空閨に臥して涙雨の如しの境に陥る。彼女も亦延子と同型の人物にして、大な

るプライドを有す。

ユンケル氏は柴田環を激賞して女史は獨り卓越なる聲樂家たるに止まらず、優秀なる音樂者なりといへり。彼女がシエーネ、エルレンを唱ひて初めて外人を驚嘆せしめたるは明治三十三四年の交にして、爾來進歩の益々著しきあるも、女性としての價値は歳と共に降下せり。帝國劇場が歌劇部を起し彼女の之が首腦となれる、自ら任ずる處大ならんも、面に白粉を施し、身邊を飾りて他の女優と共に舞臺に立つは一種の藝人に異らず。而も女優すら彼女の下に立つを屑しとせず、口を揃へて反對したりと謂はずや。

初め彼女は軍醫某に嫁し、も、虛榮心強きの故を以て一家の主婦たる能はず、夫の滿洲の野に出征せる間に忌しき風聞の世に傳はり、間もなく趣味合致せずとて自ら離婚を要求し一箇獨立の音樂家として世に立ちて以來、品行

上の非難は一層甚しく身邊を圍繞したり。固より眞の風説に過ぎざるあり、事實の明かなるあり、近者彼女の名を以て世に出したる『世界の歌劇』なる一書は疑ひもなく情夫某の筆に成りしものなり。近時ノラ劇マダ劇の流行より『新しき女』開放されたる女』といふ語の盛んに用ゐられ、意志弱き婦人若くは生學問せるオチャツビー連は斯く稱せらるゝを一種の誇として往々娘御前に有るまじき振舞に出づ。而してさる語の何の意味を有するや明に知り難きも、婦人固有の淑徳を没却して本能の儘に動く者を指すとせば、柴田の如きは確に新しき女の一人なるべし。

政治的婦人

近頃英國に於ける女權擴張論者の爲す所を觀るに、彼等は議會の傍聽席より有るまじき言を放ちて議事を妨害し、守衛の之を放逐せんとするも、各自鐵鎖を以て身を柱に縛せるより如何ともする能はず。甚しきは商家の硝子窓を破壊し廻りたる時は一般の同情を失ひ、中には牢獄に投せられしもあるが、彼等の牢獄より出づるや他の女權家はデモンストレーションの爲め盛大なる行列儀式を以て迎へ、其狂暴なる振舞には男子も舌を巻けり。日本にも近年女權擴張を口にするあり、男子の運動に婦人の加はるあり、去れど英國の如く未だ甚だしきを見ず。又我婦人の位置としてさる眞似を爲すは絶対に社會の根本思想と相容れざるべし。

從來家庭以外に活動の天地を見出さざりし我邦の女性が社會的となれるは必ずしも悪しき現象といふべからず。而して所謂現代的婦人の先驅としては蓋し何人も鳩山春子を推すべし。彼女は鍋島榮子の富と門地を有せざるも、非常識の虛榮心に囚はるゝ程思慮の缺けたる婦人にあらず。下田歌子の姿色と才略なきも未だ嘗て品性上に於て世評に上りしを聞かず。又大山捨松の學問なきも、無學にして唯無鐵砲に虛名を博する爲め跳廻る山脇房子や原禮子の亞流にはあらず。苟くも人の妻たる者は家庭の女王たると同時に、夫の事業に對して同情と趣味を有し、内助外助相須たざるべからずとは彼女の理想にして、別段ジスレリー夫人を氣取るにあらず、眞面目に斯く信せるらし。かるが故に之を實行したり。

鳩山の政戰場裏に立つや、或は其參謀長となりて帷幄に籌畫し、或は運動

員となりて日夜選舉區を東奔西走するが如き其一例なり。曾て憲政黨内閣組織に際し、自由進歩兩黨の士争ひて廟堂の人たらんとするや、春子は早稻田に日参し、大隈伯に迫りて鳩山を外務大臣たらしめんと運動したりき。然れども外相は伯自ら兼攝するに決せるを以て、終に鳩山を外務次官に任命したり。當時春子は鳩山を慰諭して曰く、伯の兼任恐らく長きにあらず、其時こそ夫君は必ず大臣たるべしと。

然るに大石、尾崎等の大臣となるに及び、春子は憤然として大隈首相邸に至り、鳩山の決して尾崎以下に買倒さるべき人物にあらずと大氣焰を吐散らしたれば、流石の伯も煙に巻かれたり。

蓋し彼女は社交的婦人といふよりも、寧ろ政治的婦人なるが如し。如上の事實を外にして、或は熱心なる女子参政論者たるが如き、或は萬國平和婦人會の爲めに運動したるが如き、其政治的方面に興味を有せるを見るべし。然れども家庭に於ける彼女は良妻たると共に又賢母たり。世間或は鳩山の變節を諫止し得ざりしを以て春子女史の一失なりといふ者あるも、寧ろ彼女は前途發展の爲め勸めて此舉に出でしめたるらし。

鳩山歿後は一切の婦人運動に關係せず、専心家庭の人となれり。多年夫君を助けて一度大臣たらしめんとしたる効なきに畢りしは終生の恨事といふべし。要するに春子は明治の中樞中第一に居るべき人物、随つて其勢力名望も亦他の虚榮的婦人の企及する所にあらず。

川上貞奴

山芋化して鰻となり蛤化して雀となる、オツペケペー化して壯士俳優となり壯俳化して興行主となる、川上音次郎をして彼が如く成功せしめたる豈に半ば以上はマダム貞奴の力に因らずとせんや。貞奴は元と氏も素姓もなき一賤婦のみ。然れども彼女は一種の辣腕を有す、野郎を屁とも思はぬ男勝りの氣象、巧みに立廻る社交的才氣、何事も斷じて行ふ度胸に至つては到底尋常婦人の企及すべからざるものあり、此點に於て確かに一箇の傑物たるを失はず。

彼女の才氣を以てして之に多少の學問を有せしめ、今少し身體を強健ならしめ、之を藝人社會に置かずして中流以上の婦人界に立たしめば、下田歌子、

山脇房子、鳩山春子の亞流となるべき柄の女なるべし。

嘗て奴の芳町に左袂を取るや、艷名教坊を歴して三千の佳麗顔色なしといは、少しく油を懸け過ぐるも、兎も角もデレ助薄ノロを惱殺せしめたる流行兒なりき。曾て千歳米坡は才人光妙寺三郎を不遇の境より救ひ、再び愛人を世に出したれば米坡の名は光妙寺の名と共に揚れり。貞奴も然るべき名士を生囚りて實意を示せば、更に女を揚げアツ好くば玉の輿に乗るを得たらんも知るべからず。然れども相手はオツペケペー上りの川上音次郎なり。順調に行くも漸く女優の頭目たるに過ぎず。去れど一概に言ひ難きは參喰ふ虫も何とやら、況んや藝妓と俳優は猫に鯉節といふに於てをや。

二人者が夫婦の關係を結びて間もなく川上は柄にもなき野心を起して東京より代議士候補に打て出でしも無論失敗して元の奎阿彌となり、東京に居る

能はずして貞奴と共に遁逃の策に出づ。當時彼女は心配おしでないよと川上を激励し、且つ彼に策を授けて一隻の短艇に夫妻同乗し、遠州灘乗切りの冒險を企てたりき。其計畫は圖に中りて虚名を博したれば、此勢に乗じて關西に興行し、更に第二の虚名獲得策として第一回洋行を企て、漸次山を當てて正劇界の大立者となりき。

俳優としての川上は論にも箸にも掛らぬ大根のみ。貞奴とても女優としては三文の價值なきも、我邦に於ける新派女優の鼻祖となりしを以て、遂に一箇の人氣者となりたるのみ。然れども彼女は日本のサラベルナードを以て任じ、配下に對して威張り、或は呼ぶに先生の尊稱を以てせしめ、遺憾なく虚榮心と浮誇心を發揮せり。彼女が女優養成所を創設したるは畢竟之に依て虚名を博するの手段に外ならず、言ひ換ふれば虚榮心を満す爲め他の虚榮心に

投じたるのみ。森律子の如きは即ち貞奴の虚榮心と、一は自己の虚榮心の爲めに犠牲となりて芝居藝人に墮落したるなり。

川上の貞奴に對する嫉妬は其社會の一話柄なりき。彼が舞臺に拙技を演ずるや、必ず貞奴を己れの女房役とし、決して之を他の俳優に配せしめざりき。要するに川上の所謂正劇なるもの、世の呼物となりしも、又彼をして伊藤を始め二三貴紳の邸に出入するを得せしめたる者も亦貞奴なり。是を以て川上の崇めて噂大明神とし、貞奴の川上を臂に敷きて願使したるは怪むに足らず。昨年川上の大阪に病むや貞奴は晝夜帯を解かずして枕頭に看護し、其逝くや倒るゝまでに悲痛の情を示したる、如何にも殊勝の至りなるも、歿後未だ暮年ならずして世間早くも彼女が福澤桃介と密に播州龍野に相會したるの情事を傳ふるに至る。而して新聞の報ずる處に據れば、曾て川上は桃介の一

得意の人 失意の人
 二二八

小星と相知り目を偷んで屢々墨堤の田川に密會を重ねぬ。桃介固より箇中の消息を知るも思ふ處ありて隠忍し、川上の病危篤を傳へたる時、特に小星を大阪に下して枕頭に最後の告別を爲さしむ。當時貞奴は大に桃介の厚情に感激し、川上の死後屢々接近するの機會を得て遂に彼に許すに及ぶ。桃介曰く乃公の貞奴を弄ぶは川上に對する一種の復讐のみと。桃介の悪性は世已に定論あるも、貞奴に至つては地下の亡夫に見ゆるの面目なかるべし。

得意の人 失意の人 終

人名索引

あ	秋山好古……………三三	石井義太郎……………三〇	え	太田三次郎……………三〇
	有馬良橋……………三〇	井上敬次郎……………三〇		奥宮衛……………三五
	明石元次郎……………三五	板垣退助……………三六		奥田義人……………三五
	荒川義太郎……………三六	井上馨……………三六		岡部長職……………三六
	新井章吾……………三八	石黒忠恵……………三五		尾崎行雄……………三六
	秋元興朝……………三九	伊豆凡夫……………三七		大隈重信……………三九
	安藤幸子……………三七	尹始炳……………三九		大井憲太郎……………三九
い、ぬ		う	お、を	小笠原長幹……………三九
伊藤大八……………三三	内田康哉……………三二	岡崎邦輔……………三三		正親町實正……………三九
井口省吾……………三三	上原勇作……………三二	奥繁三郎……………三三		大森鐘一……………三九
尹致昊……………三三	宇都宮鼎……………三三	大山巖……………三三		大原武慶……………三九
石本新六……………三三	植村俊平……………三三	小澤武雄……………三三		大竹貫一……………三九
伊地知幸介……………三三	宇都宮太郎……………三三	落合豊三郎……………三三	か	川上操六……………三三
伊豆凡夫……………三三	内田良平……………三三	大庭二郎……………三三		上泉徳彌……………三三
あ、い、ぬ、う、え、お、を、か				

かきくこさしすせそたち

川上親晴	小林樟雄	志佐勝	孫乘	宋乘
河野廣中	後藤新平	澁澤樂一	孫乘	宋乘
川上貞叔	小松原英太郎	柴川四朗	孫乘	宋乘
川上音次郎	小林孝子	品川彌二郎	孫乘	宋乘
木越安綱	吳錦堂	柴田家門	田村怡與造	高島輔之助
清浦壺吾	康有為	澁谷在明	田中義一	財部彪
木下謙次郎	幸田延子	徐世昌	田健二郎	田尻稻次郎
金玉均	西園寺公望	柴田環	田健二郎	竹内正志
木内重四郎	飯島重雄	鈴木久五郎	高橋作衛	高橋作衛
黒澤源二郎	飯谷芳郎	千家尊福	建部遜吾	段芝貴
黒田清隆	西郷菊次郎	盛宣懷	張勳	張勳
桶瀬幸彦	佐々木安五郎	宗重望	張勳	張勳
黒木爲楨	櫻井一久	園田安賢	趙乘	趙乘
兒玉源太郎	阪本金彌	孫逸仙	趙乘	趙乘
柴野義孝	崔時亨	孫逸仙	趙乘	趙乘

恒吉忠道	那桐	福澤桃介	三浦逸平
角田眞平	西村精一	星積八郎	陸奥宗光
寺内正毅	西本國之輔	堀田正養	村上彰一
寺尾享	野津道貫	細野次郎	本野一郎
東條英教	野々山幸吉	朴永孝	森久保作藏
床次竹二郎	原敬	松田正久	森岡正元
利光鶴松	長谷川謹之助	町田經宇	矢野文雄
戸水寛人	波多野敬直	松岡康毅	山屋他人
富井政章	鳩山和夫	松田秀雄	山口素臣
豊部新作	鳩山春子	松方幸次郎	山路一善
唐紹怡	福島安正	宮岡直記	山田繪之助
中村進午	福永吉之助	三島彌太郎	安場保和
中島行孝	福永吉之助	三浦梧樓	山内滿壽治
			山縣伊三郎

つて、とな、に、の、は、ふ、ほ、ま、み、む、も、や

わ
渡邊洪基……………六
若槻禮次郎……………六

り
李鴻章……………一九
李周會……………二〇
李逸植……………二〇
李完用……………二〇
李容九……………三一

索引了

大正元年八月二十八日印刷
大正元年九月十日發兌

得意の人 失意の人
正價金六拾錢



著作者 鷓崎熊吉

發行者 伊東芳次郎
東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 小川徳三郎
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京市神田區鍛冶町八番地
電話本局八八四番
電報東京一七一番
東亞堂書房

加藤咄堂先生著

世態人情論

大判美本六百頁
送費拾貳圓拾錢

本書は的確なる統計と、奇警なる觀察を經とし、多趣有益なる史上の事實と、興味深き文藝上の作品を緯とし、痛烈なる如き快筆を以て、人心の機微、世相の表裏等を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試みたるもの、時に親を減して新馬車を揮ひ、時に時々として處世の妙論を語る。或は是れ壓搾せられたる風俗地理とも目すべき、平易に示されたる社會學とも稱すべし、生活雜に備ふるの士、就職の方針に惑へるの青年等は必ず本書を一讀せよ。

弘道主筆足立栗園先生著

古英生 活 觀

中判美本約百卅頁
送費四圓十錢

(北海タイムス批評) 幾多の史書を採りて古武士が平生其家な率ゐし日常生活の狀態一斑を觀察して古武士が平生其成せし武將英雄平生の大覺悟を尋究して梗概を編次せしものなりといふ。

堀田文學士 共著
村田神學士 共著

圓滿生活論

中判洋裝二六〇頁
送費八圓十錢

(東京日々新聞批評) 圓滿生活は人生の理想なり近來文明の向上と共に社會は益々複雑となり、人間の欲望は愈々停止するところを知らず、人間の生活は愈々矛盾、破綻、衝突、多き圓滿主義を去ること一日一日と遠からんとす、本書の出づる決して徒爾ならざるべきなり。

福澤桃介君著

富の成功附株式成功策

大判洋裝壹七〇頁
送費五圓十錢

(報知新聞批評) 在來の成功致富を説く者に異り著者一流の露骨なる成功秘訣を語る所興味甚大なり殊に其經濟的用心ある猪突主義は最も味ふ可き一家言にして附録株式成功談亦調適す可し近來の快書也。

金々先生著

致富儲けばなし

大判洋裝壹四〇頁
送費六圓十錢

(報知新聞批評) どりや談義を初めやうと面白可笑しく説出す富流金儲傳授、是を讀んで金儲の出來ない人は福の神にもピリケンにも見放された人なる可し。

松波法學博士序・原田定造先生著

手形取引の顧問

大判美本壹九〇頁
送費八圓十錢

本書は近來手形の取引が益々頻繁を加ふるに隨ひ往々複雑な法律上の手續を誤つて意外の奇禍を被る者多きを憂ひ手形法に精通せる原田先生が爲替手形、約束手形、小切手國際手形等の性質、形式、受授の手續を詳細に説明して且つ附するに「法律用語の解釋」を以てせられたるもので松波博士が實に「問答體に依りて手形に關する法規の一般を平易に説明し讀者をして直ちに其知らんとする所を得せしむるは本書の特色なり」と賞せられたる實業家必讀の良書である。

文學士勝屋錦村先生譯

社會主義が實行されたら

大判洋裝二一〇頁
送費六圓十錢

(大阪毎日新聞批評) 本書は社會主義者の理想とする世界は一箇の夢想郷に過ぎずとなし之を實現したる世界か社會に斯の如き惡結果を生ず可しとの趣旨を労働者の家庭を背景にして面白く書かれたる獨逸の代議士ヒテレルの著を述べたる痛快なる讀物なりといふべし。

堀内新泉先生著

時間活用法

大判洋裝二三〇頁
送費八圓十錢

(報知新聞批評) 人生の如何に時間の價値大なるかより時間を使用するの心得をば數十百項に別して丁寧深切に記述したり時の費ふべきこと時を浪費すべからざることを何人も之を言ふ處なれども之を知りて行ふ者少く途に墜んぬ秋風雲變を吹くに及んで悔恨するもの多き時に於て斯の切實なる書の出るは喜ばし。日本新聞批評) 金の浪費せぬ人はありとも時間を浪費せぬ人は殆ど無き紀律の必要なき日本人は最も意を並に致すを要す是れ本書の必要なる所以。

藤田日東先生著

近獨學法

中判美本二三〇頁
送費六圓十錢

現時の學校教育は智能啓發に對する一般方略を授くるに過ぎず適者生存の活社會に立て劣敗者たり老朽者たる者免れむと欲する者誰れか常に獨學に依りて活ける智識の培養に努めざるべけんや本書は即ち此獨學自修の新捷徑を詳説して餘蘊なきもの學生諸君は勿論何人と雖も必ず讀せざるべからず。

加藤咄堂先生序・本多五陵先生著

健康朝起の勧め

中判美本壹五〇頁
送費四圓十錢

(中央公論批評) 生理的に精神的に朝の冷氣に打たれて麗かなる太陽の光を呼吸することは大なる益のあるものである本書は其効用を並べ更に古來之れによつて成功の基礎を築いた人並びにその遺訓を收めたものなり。

大場健兒先生著

どもり矯正の實驗

中判美本全一冊
送費四圓十錢

(時事新報批評) 著者自身が多年吃音者として苦みし結果種種の研究を爲し自己の吃音を全癒したる經驗によりて吃音に對する感想及び最も簡單なる實驗上の吃音矯正法を叙したるもの吃音者の参考とすべきなり。

安田操一先生著

禁煙の實驗

大判洋裝壹六〇頁
送費六圓十錢

(東京日々新聞批評) 著者が實踐を以て其の効果を試みし告白なり經濟上及び衛生上より討究して其の効驗と害とを明らかに證明したるものなり。(萬朝報批評) 酒は止められるが煙草は止められぬとはよく人の言ふとなりこの書は具體的にその方法を説き禁煙の爲し得らるるにして且つ如何なる効果あるかを説けり。

山路愛山先生著

勝海舟

大阪毎日新聞批評 幕末の偉人海舟勝麟太郎先生の生涯を記せる書なり海舟先生幕末に生れ頑冥なる幕臣の間に困難に處し維新の天の大業を翼賛せし事蹟を愛山一流の筆にて縦横に叙説せり狂と呼ばれ轟と呼ばれし海舟の一生は一面に於て幕末の活歴史なり本傳能く其間の消息を傳ふ。

山路愛山先生著

佐久間象山

中央新聞批評 象山は維新の志士にして三尺の童幼も知るの偉傑 愛山氏は史家にして文章を以て著る。此著者にして此偉傑を傳ふ蓋し近來の快著と謂ふべし。叙するところ「少年時代」「第一回遊學時代」「在郷中時勢の變化」「再遊學」「歸郷」「第三回の出府」「在國費居中の象山」「非命に斃る」の八章に分ち的確なる考證と明快なる史眼とを以て極の詳細に詳傳せり。殊に口語文を以て綴りたるを以て低級の讀者にも適すべし。

和前天華先生著

坂本龍馬

東京日々新聞批評 坂本龍馬は幕末の日本が産出したる第一流の偉人にして維新の大業の中軸たる薩長連合は一に彼と大西郷との默契によりて成ると稱せらる不幸中途に於て暗殺の厄に遭ひ其亦史料散佚して多し傳はらず本書は土佐の士に聞き寺田屋に聞き維新史料を搜り殊に手から龍馬の遺著したる今村信郎氏に聞き之を小説體の讀物に綴りたるものにて發賣以來江湖の大歡迎を受け第五版を出せり。

長谷場文部大臣閣下序文及長歌 福本日南先生序・伊藤痴遊先生著

賜天覽 西郷南洲

三册合本特製美本 正價三圓五十錢送費十六錢

萬朝報批評 痴遊其辨舌の如く筆を躍りて南洲を見るが如く描き出だしたるもの、講談速記に非ず、島津家騒動より征長事件まで廿一章に分てり、これを讀めば眉張らずしてしかも感化を受くること多し、福本日南の序と英國にて發見されし珍品たる南洲の寫眞と巻頭を飾り(維新批評)大西郷傳を中心として日本歴史中最興味多き幕末史の側面を寫したるもの、傳の詳密を極めたる事、對話の巧妙なる事、宛然其人を其場に目睹するが如きは著者が多年演壇より得たる、縦横活殺の手腕によりて描かれたり、而して叙本文の巧妙なる事は更に驚くべし、鹿兒島櫻島、京都岩倉、江戸城等の記事殊に可なり期々吟誦すべし、南洲の外編中の人物何れも活躍するが中にも勝安房、山内容堂、岩倉具視、等最も描かれたり、續編に於ける江戸城明渡の一節は、眞に敵も味方も一齊に手を拍つて讚嘆すべき所也、近時出版の英雄傳中最特色あるもの也、夏日綠蔭の下之れを播かば暑を忘るべき也、好著也、快著也。

林澤備大臣閣下題字・加藤晴室先生序 伊藤痴遊先生著

陸奥宗光

萬朝報批評 伊達小二郎の昔より「かみそり大臣」の當時に至る一代の奇行偉勳を叙す、艶姿、嬌舌、其間を點綴し、怪男子の面目は怪男子の筆によつて頗る活躍せり。

藤田長江先生編

福澤翁言行錄

本書は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬慕すべき言行を録してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり。

伊藤痴遊先生著

第一快傑傳

日本及日本人批評 頭山滿、桂小五郎、星亨、中江兆良、中井權彌其他の豪傑奇人の逸話奇聞を小説體に書き綴りたるもの、津々たる興味、眼前其の人を躍如たらしむ。消閑の好書たるのみならず、青年子弟の修養にも實するに足らん。

伊藤痴遊先生著

後の西郷南洲

やまと新聞批評 著者更に滿腔の熱心を凝して以て此の編を成す。談は益々佳境に入りて、筆飛び墨舞ふの趣あり、谷村軍の持久の力に富める、桐野藤原の猛烈當る可からざる、南洲翁の面目心事、殊に歴々として紙上に躍動し、雄大な文、悲壯淋漓たるものあり、且つ最も複雑紛糾なる記録と傳説とを考取捨して、力めて公平なる見地に立て官軍兩軍の事情を明かにしたる、著者の用意と其勢も亦實に多とせざる可からず。

伊藤痴遊先生著

西郷南洲外篇

南洲翁と相識し、一首の和歌に勤王の赤誠を止めて、薩摩の瀬戸に身を沈めたる傑僧月照を中心とし、南洲翁の苦衷、維新活動の一大裏面等を著者獨特の快筆を以て直寫せるもの、一讀神懸ひ、鬼哭するの思ひあり、南洲翁の大人格に服せるの士は、又其別頭の同志たる月照を知るとを忘る勿れ。

白田石楠先生著

西郷南洲言行錄

毎日電報批評 西郷隆盛は後世に懸りて一大奇蹟なり彼が偉大なる生涯の出發點は本邦歴史中の大革命なる維新の風雲にして其趣味多き言行の終焉は薩摩軍人に依りて色々のれたる大感動即ち城山の自刃にありき此書は此偉人の生涯を縦横に寫して割さざらんとするもの、如く材料を採り集めて傳言、行の分類に收め英雄の傳記として最も適宜なきを得たりと云ふべくたゞに青年子弟の好讀物なるならず明治維新史の一面として世人の一讀すべき真書なり。

黒法師先生著

世界の美人探検

箱入美本四八〇頁
正價十一圓四十錢
送費八錢

(報知新聞批評) こんな面白い物語を近頃讀んだ事がない。唯、五百頁を終始一貫して不思議な事許り續出する。唯、何がいかに絶世の美人か。一目見た許りで其美しさに氣絶しない男が、張敷い美人が二十年以上を生き永へて、戀人の子孫が、此物語を探しに来るのを待つて居る。所は何處か名は、何と? 此物語を讀むとまだ、何とも言へぬ不思議な面白い事。澤山出で来る。吾知らずホーツとする稀世の神秘小説。

野口米次郎先生著

邦文 日本少女の米國日記

大判美本二八〇頁
正價七圓七十五錢
送費八錢

(都新聞批評) 英詩人として有名な野口米次郎君の著。モト、英文も彼地にてのせし。此度日本文に譯して記せしもの。此著は即ち野口君自身の觀察を、名を婦人に藉りて記せしものと見ること早分りなり。流石に詩人なり、其觀察總て詩的にして、且少女の名を藉りしだけ、優にやさしく上品にして、高雅なり。

第六高等學校獨逸語講師 秋元蘆風先生譯

詩粹 シルレル詩集

袖珍美本一九〇頁
正價六圓四十錢
送費六錢

(獨逸語講義批評) 袖珍の詩集式製本は、東亞堂主人が出版に對して、假初ならぬ注意のある所を認むべく、坂井紅兒、伯の挿畫また清新愛すべし。ヘローレン、アンデル、潜水者、カッサンドラ、姫、保護、騎士トッゲンアルビ、ボリクラ、テスの指輪、手袋、凱旋宴の入篇を収め、各詩に親切なる註解を附せり。紙質精良、印刷鮮明、譯者と書肆が、苟くもせざる注意を見るに足れり。

文學博士幸田露伴先生著

小説はるさめ集

大判美本百七十頁
正價七圓七十五錢
送費八錢

(讀賣新聞批評) 露伴氏の傑作中の傑作と稱せられたる一口劍。風流佛。未練の三篇を合したるもの(國民新聞批評) 殊に文章の精緻にして、崇重なる而も洒脱にして、脂粉の氣を脱せし世に及び易からず著者の出世作として明治文壇の産物として讀んで多量の興味あるべし(日本人批評) 風流佛の超理想化して描寫殆んど神に迫る。

文學博士幸田露伴先生著・沼田穎川先生註

註 二日物がたり

中判美本百十頁
正價四圓四十錢
送費四錢

(此一日の一節) 西行がすかに眼を轉じて、聲する方の闇を覗へば、お玉の黒きが中を、朽木のやうなる光りもてる闇とも雲とも分かざるもの、仄白く立ちまよへる上に、其様異なる人の丈いと高く瘦せ衰へて、凄しく……(彼一日の一節) 月はやがて没るべく、西に廻りて、御堂に射し入る其光り水が如く、御堂の間に、端然として合掌せる二人の姿を浮ぶが如くに、御堂の間に、照らし出しぬ。

山口小太郎先生序・秋元蘆風先生著

シルレル研究 鐘の歌評釋

大判美裝全一冊
正價七圓四十錢
送費四錢

本書は詩聖シルレルが、治工の大鐘を鑄るに擬して、幽玄妙なる人生の奥秘を謳へる一大詩篇にして、其代表的の名作たるは已に定評あり。秋元蘆風君はシルレルの研究に於て造詣深き之士、由來難解を以て稱せらるる「鐘の歌」も、あたらしく透徹明かなる評釋によつて、一讀双を迎へて、驚くべき本書を一讀せざるべからず。

町田柳塘傳史著

訂正 漢詩講話

袖珍美本二五〇頁
正價五圓十錢
送費六錢

(報知新聞批評) 漢詩に造詣深く且つ趣味に多方面なる才人町田柳塘氏の著なり。其記述講話の體も漢詩人の口吻と大に異なるものあり。漢詩の作法を平易明快に然も趣味を加へて。記述されたれば、初學者には不知不識の間に會得さるべく評釋も新様の見解あり。これだけ讀みても頗る興味あるを覺ゆ。附録として俳句と漢詩の一文を添へたり。

文學士大町桂月先生著

作文法講話

中判美本百十頁
正價三圓十錢
送費四錢

(萬朝報批評) 先づ述者自身の文章を掲げ作前の用意、辭句排列の苦心等に就き詳細な説明をし、更に之より敷衍して詩文歌俳などの種々なる作例を引き、直截に桂月一流の文章觀を述べ、講義的に堅苦しくなく作文法を説いて居る所が面白く、此種の本としては趣味の多い點に於て、一頭地を抽いて居る。

高濱虛子先生編

新寫生文

中判美本二三〇頁
正價五圓十錢
送費八錢

(文章世界批評) 著者は何れも寫生文界の鐵中錚々たる人々なれば寫生文を學ばんとする者に取ては無上の模範書たるべし。記者は就中『觀山詣』を愛讀するものにて、殊に其の中の『鳥の聲』の一篇の如きは稍々細工を弄したる痕の見えらるに拘らず尙冒知らぬ感想を惹起されざる能はざるを覺ゆ。

文學士武島羽衣先生序・志賀華仙先生著

和歌作法

中判美本一三〇頁
正價三圓十錢
送費四錢

(讀賣新聞批評) 主として短歌作法の骨子を記述せるものにして内容を分ちて四となし第一章は和歌沿革の概要を説き第二章以下作法、歌調、詠歌上の諸注意に及びり叙述簡易初學者の好参考書也(東京日々新聞批評) 詠歌に關する諸種の注意を掲載し、整頭に類語枕詞及歌の書式を列記せり歌學の門に入らんとする者の好参考書ならん。

佐藤仁之助先生著

新百人一首通解

寸珍美本百二十頁
正價二圓十錢
送費二錢

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえお順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の参考にも至つて便利な可愛い本! 年末歳首の御進物用などには、外に類なき適當品です。

東京高等師範學校講師戸川秋骨先生著

英文學講話

中判美本一五〇頁
正價三圓十五錢
送費六錢

本書は近世の本邦文學に深大の影響を與へたる英文學の如何なる者たるかを詳説して英文學と大陸文學との關係に及び更に沙翁ミルトン等よりカーライルラスキン等の諸家を論じて其作品を評し且ローマンチンズム・ナチュラリズム等の因て來る所以に亘りて光焰萬丈紙上飄々の聲を發す近代の新文學を知らんと欲する者の速すべからざる名著也。

本日本文藝叢書既刊目録

(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)
永著	永著	琴著	山南編	文著	彦著	彦著	編者不詳	山南編	編者不詳	山南編	著者不詳	馬著	三式	文湖
義士	義士	馬	通	八	邯鄲	邯鄲	續大岡政談	通俗三國志	通俗三國志	通俗三國志	浮世床	俠客傳	通俗三國志	通俗三國志
いろは文庫	いろは文庫	佳作集	通志	笑人	諸國物語	諸國物語	續大岡政談	通俗三國志	通俗三國志	通俗三國志	浮世床	俠客傳	通俗三國志	通俗三國志
(後完)	(前)	(一)	(八)	(全)	(後完)	(前)	(全)	(七)	(六)	(五完)	(全)	(下完)	(五)	(五)
(50)	(49)	(48)	(47)	(46)	(45)	(44)	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)	(36)
成田著	山編	彦著	彦著	彦著	彦著	山編	著者不詳	山編	紫式部	西鶴	水滸	平家物語	平家物語	近松
雨月	水滸	田舍源氏	田舍源氏	田舍源氏	田舍源氏	水滸	保元物語	水滸	枕草紙	西鶴	水滸	平家物語	平家物語	近松
瘡癩談	滸傳	氏	氏	氏	氏	傳	平治物語	徒然草	徒然草	佳作集	佳作集	佳作集	佳作集	佳作集
(合)	(四)	(三)	(二)	(一)	(三)	(二)	(合)	(二)	(合)	(二)	(一)	(後完)	(前)	(二)

本日本文藝叢書既刊目録

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
一返舎	著者不詳	馬著	左衛門	文湖	著者不詳	一返舎	馬著	文湖	馬著
膝栗毛	太平記	椿説弓張月	通俗三國志	通俗三國志	太平記	膝栗毛	椿説弓張月	通俗三國志	通俗三國志
(後完)	(二)	(下完)	(二)	(二)	(一)	(前)	(中)	(一)	(上)
(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)
三式	馬著	著者不詳	著者不詳	文湖	其江	馬著	著者不詳	西井	文湖
浮世風呂	俠客傳	一休諸國物語	太平記	通俗三國志	其積佳作集	俠客傳	太平記	西鶴佳作集	通俗三國志
(全)	(中)	(全)	(四)	(四)	(合)	(上)	(三)	(一)	(三)

●誰れが讀みても面白き日本文學の傑作全集。

文學博士 幸田露伴先生 校訂解題

日本文藝叢書

▲立五寸。横三寸。振がな付。每册三百頁内外。拾錢均一。特製金彩本、拾錢増(送費一册四錢。五册送八錢)

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

速成漢學捷徑

箱入美本四五十頁 正價壹圓貳拾錢 送費十錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

國語漢文要語詳解

全三冊各三百數十頁 正價各四圓十錢 送費各八圓十錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

國語漢文要語詳解

中判美本百九十頁 正價四圓十五錢 送費六圓十五錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

漢字異同辨及用法

寸珍美本貳參〇頁 正價二圓十錢 送費二圓十錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

國語異同辨附假字表

寸珍美本百八十頁 正價二圓十錢 送費二圓十錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著

假字用法及動詞語尾表

ポケット入形折本 正價六圓十錢 送費六圓十錢

幸田露伴先生序 文學士 沼波瓊音先生編

俳句大成

橫濱美本四五十頁 正價八圓二十錢 送費八圓二十錢

文學士 佐々醒雪先生序・文學士 沼波瓊音先生編

俳句講話

中判美本二四〇頁 正價四圓十錢 送費六圓十錢

文學士 久保天隨先生序・文學士 沼波瓊音先生著

俳句の研究

中判美本約二百頁 正價四圓十錢 送費六圓十錢

文學士 沼波瓊音先生著

俳句階梯

中判美本壹二〇頁 正價三圓十錢 送費四圓十錢

文學士 沼波瓊音先生校訂 三宅嘯山師遺著

俳古選新選

橫濱美本二百卅頁 正價四圓十錢 送費六圓十錢

鳴雪、竹冷、瓊音、服部耕石君著

人生俳句集

中判美本全一冊 正價 送費

組育ヘナルト通信員イ、シエ、ハリソン氏原著
法學士神崎勝光、實田江東、兩君共譯

日露の再戰

本書は將來日露兩國の再び東亞の天地に砲火を交ゆべき運命を有する所以を、歴史、地理、外交、經濟、人種問題等の諸方面より、縱橫脱白に、警拔なる論評を試み、以て世界諸國の權力論に及べる快著にして、原書發售以來廣く識者間に喧傳せられ早くも數十萬部を賣盡せる事實に徴するも如何に其稱世の名著たるかを知るに足らむ。苟くも志ある同胞は他山の石として速に本書を一讀せざるべからず。

兒玉陸軍大將遺墨 陸軍歩兵大尉
山口陸軍少將題字 本間鐵次郎君著

大判洋裝三九〇頁
送費八圓廿錢

血戰

本書は、同胞の血と、肉と、砲火とを以て彩られし日露戰爭の猛烈凄慘なる、旋乾轉坤の大活劇を、本間陸軍大尉が、濃厚な藝術眼を以て、精細に活寫せられたる、空前の劇戰記にして、一讀魂飛び、神慄く、日本男子必讀の大快著也。

大判洋裝二三〇頁
送費八圓拾五錢

日野陸軍少佐校閱・平山周先生著

最新飛行機圖說

(東京日日新聞批評)本書は飛行機の沿革機體の構造及材料機體の構成其の効率推進機に關する諸般の事項を説明することを詳細に飛行機に於て最も重要な發動機の構造に力点を注ぎたるもの如く多少學術的知識を加味して而も通俗に之れを説明せる所甚だ要を得たり卷末にはライト、フマン、カーチス、ブレリオー、アントワネット、アラビア、其他各飛行機の明細なる圖解を掲げあり、本邦飛行界の泰斗日野少佐の序々に、之れを歐洲の新著に比するも敢て遜色なきを信す云々とある、又宜なるべし。

大判美裝全一冊
送費八圓五十錢

文學博士富士川游先生序・澤田順次郎先生著
ドクトル

科學より見たる男女の關係

本書は千古の一大疑問たる、男女兩性の差異を研究し、冷僻なる科學の立脚地より、兩性が赤裸々の真相を暴露して、愛研究の必要を唱道し、且つ男女各任務の分業、生殖の意義、色慾の害毒等を説き、男女兩性を以て各其本分を自覺せしめ、以て頹敗せる現時の社會風教に一大痛棒を加ふ、男女孰れたるを問はず、必ず一讀の要ある快著也。

大判美裝全一冊
送費四圓三十五錢

丘。福來二博士序・薄井秀一先生著

神通力の研究

世に不可思議の力あり能く聲無きを聽き、見ざるを察し、未だに防ぎて、福運を將來に開拓す。稱して神通力と呼ぶ。而かも此の不可思議の力たるや、實に我等人類に通有せる一大伏能なりと云ふに至つては、誰れか此支妙の樞機を識得して以て鬼を役し、神を驅るの大偉力を養はむことなし。何人に對するも極めて興味深き緊要文字!

大判美裝一八〇頁
送費八圓十錢

大日本催眠學會長 小野福平先生著

催眠術治療精義

本書は、大日本催眠學會會長として、本邦催眠術研究者の先覺たる小野福平先生が富麗なる學識と、多年の實驗とを基礎とし、博く東西の學說を參酌して筆を催眠術の原理とを礎とし、心理學、生理學、醫學等の根柢より、催眠術を以て治療すべき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を説明せられたる催眠學界空前の大著にして、催眠術研究者は勿論、醫家、經世家等の荷も看過すべからざる良書也。

大判美裝二四〇頁
送費九圓十錢

512562



終

